

琉球大学学術リポジトリ

学習者主体の活動型授業：
学習者オートノミーの育成を目指して

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学留学生センター 公開日: 2012-04-19 キーワード (Ja): 自律学習, 学習者中心, 学習者主体, ジグソー法, 一言カード キーワード (En): 作成者: 山元, 淑乃, 琉球大学留学生センター, Yamamoto, Yoshino メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/24142

学習者主体の活動型授業 —学習者オートノミーの育成を目指して—

山 元 淑 乃

要 旨

本稿は琉球大学留学生センターで実施された、日本語聴解と口頭表現授業の実践報告である。近年、様々な教育現場において学習者の自律性が重要視されるようになってきている。聴解と口頭表現という日本語の運用能力を高めつつ、学習者オートノミーを育てるためには、どのような授業をすればよいのだろうか。筆者は、いわゆる「学習者中心」の授業から「学習者主体」の授業へと移行することで、自律的学習実現に向けての方向性を見出した。学習者に選択権を与え、ポートフォリオを実践し、学習者中心の活動を行うだけでは、学習者オートノミーは育たない。学習者オートノミーの育成には、クラス活動における他者との対話を通じて、学習者自身の自己表現を支援し、「学習者主体」の教育を行うことが必要であると考えられる。

【キーワード】 自律学習, 学習者中心, 学習者主体, ジグソー法, 一言カード

0. はじめに

自律学習 (autonomous learning) とは、「学習者自身が自己の学習に主体的に関わり学習を孤立化せず、教授者や教材や教育機関などといったリソースを利用して行う学習¹⁾」と定義され、日本語教育の分野では1980年代初めから必要性が指摘され始めた。青木 (2005) によると、現在の第二言語教育では「学習者オートノミー」という用語を使うことが一般的で、学習者オートノミーとは「学習者が自分で自分の学習の理由、方法に関して選択を行い、その選択に基づき計画を実行し、結果を評価できる能力」である。学習者の多様化がさらに進む現在、学習者オートノミー育成の必要性は高まるばかりである。自律性を高めるための実践研究も重ねられている (梅田2000, 上田2001, Karlsson 2006など)。

筆者は琉球大学において、主に交換留学生を対象としたプログラム運営を担当し、カリキュラムをコーディネートし、授業を実施している。短期留学生は、多くの場合、1年の留学生生活を終えると本国に帰国する。しかし、帰国後も日本語学習を継続することを望む者が多いため、日本語能力の向上だけでなく、帰国してからも勉強を続け

られる学習者オートノミーを育成することが不可欠である。筆者は2007年10月以降、到達目標の明確化、ポートフォリオ、自己評価を行い、学習者中心の授業を展開してきたが、自律的な学習が実現できなかった。そこで、その反省を踏まえ、2009年4月から8月まで、「学習者主体」の授業展開を試みた。本稿は、この試みについて報告するものである。

1. 学習者の自律性と主体性

細川(1995)では、従来の「学習者中心」に対して「学習者主体」という概念が提示されている。「学習者中心」の指導とは、「学習内容の設定において、その一部を学習者に担わせたり、学習者の関心や価値観に配慮を払ったり、あるいは教師の役割をアドバイザー、カウンセラー、援助者として考えたりすることによって、学習者に、より積極的な役割を与え学習の主体として位置付けて行う指導法(岡崎・岡崎1990)」である。牛窪(2005)はこの「学習者中心」をあくまで「教室-学習者」の関係に過ぎないものとし、「日本語-学習者」間の主体性が必要であると主張し、また、牲川(2002)は「学習者主体」を「異文化で生きる学習者が、国文化に拠らないアイデンティティを主体的に形成していくこと」としている。本稿ではこれらの概念を取り入れ、「学習者中心」と「学習者主体」を区別し、自律的な学習には学習者の主体性が必要であるという立場を取る。

2. 学習者中心の授業実践

筆者は平成20年度後期中級学習者対象の、聴解と口頭表現の授業を担当した。以下この授業を日本語Aと呼ぶ。日本語Aでは、毎回受講者から2名の担当を決め、その2名がニュースの発表を中心として授業を進行する形式を取った。担当者は教材となるニュースを選び、教師の指導を受け、授業を進行した。他の学習者は積極的に参加し、質問やコメントも述べ、授業は円滑に進んだ。しかし、学期末に行った受講者からのアンケートから、受講者が授業について必ずしも満足していないことが明らかになった。そして、この授業における自律的な学習は、成功しなかったといえる。本章ではこの授業の概要を報告し、アンケート結果から失敗の原因を探りたい。

2.1. 授業の概要

受講者は母国で日本語を学習した短期留学生9名である。性別、国籍は表1の通りである。全員来日直後で、日本語能力は平均的に「JF日本語教育スタンダード²」のA2～B1レベルであった。各科目週2コマ（1コマ90分）、全15週の、聴解と口頭表現の授業である。

この授業に、学習者オートノミーの育成を目指し、以下の方法を取り入れた。発表準備をする過程で、インターネット上のリソースに頻繁にアクセスすることで情報収集力を高められるよう、発表形式を取った。

- (1) 授業の到達目標を明確にする
- (2) ポートフォリオを導入し学習の管理を行う
- (3) 教材となる動画ニュースを学習者が選ぶ
- (4) 学習者が中心となって発表形式で授業を行う

授業の到達目標は以下の2つとした。

- (1) 一般的な話題に関するニュースを聞いて理解できる
- (2) 準備すれば、見たニュースを人に分かり易く説明できる

この到達目標を達成すべく、インターネット上の動画ニュースを教材に、受講者のうち2名の担当者が、以下の手順で授業を進めた。

- (1) ニュースで扱われる話題について簡単に説明と質疑応答
- (2) ニュース視聴（大意を取る）
- (3) 新出語彙確認と、内容に関するディスカッション
- (4) 内容に関する質問提示
- (5) ニュース視聴（質問に答える）
- (6) 質問の答えを確認
- (7) 教師による補足と解説

表1 日本語Aの受講者

	性別	国籍
S1	女	タイ
S2	男	中国
S3	男	ドイツ
S4	男	ドイツ
S5	女	台湾
S6	女	台湾
S7	女	韓国
S8	女	韓国
S9	女	中国

2.2. アンケート調査と結果

学期の終了時にアンケート調査を行い、全受講者9名から回答を得た。アンケートは以下の項目から構成されている。

- 問1. 教材となるニュースを受講者が自分で選ぶことについてどう思うか (5段階で評価)
- 問2. 授業の方法について、どう思うか (5段階で評価)
- 問3. 授業が到達目標達成のために役立ったと思うか (5段階で評価)
- 問4. これからも自分で動画ニュースを見て勉強しようと思うか (5段階で回答)

注：5段階評価：1「全然」2「少し」3「まあまあ」4「かなり」5「非常に」の順
問1から問4にも、それぞれ理由を書く自由記述欄を設けた

表2は上記のアンケート結果の集計したものである。平均値が高いほど評価が高いことを表す。

問1の結果によると、教材となるニュースを受講者が選ぶことについては、高く評価されている。しかし、問2の結果から、授業の方法については満足しなかつ

表2 授業に対する評価

問	1	2	3	4
平均値	4.6	3.3	3.9	3.1

た受講者が多いことがわかる。問3からも、授業が到達目標達成に役立たなかったと感じている学習者もいたことがわかる。学習リソースへのアクセスを問う質問である問4に関しては、6名が「これからも勉強しようと思う」、3名が「思わない」と答え、二つに大きく分かれている。しかし「思わない」と答えた3名中2名は「他のリソースを使用する」というもの、1名は「自分の勉強スタイルではない」というもので、リソースへのアクセス力という点においては一定の成果が見られた可能性がある。

2.3. 自由記述コメントの分析

上記の質問に対し、自由にコメントを書く欄を設けたところ、様々な意見が寄せられた。全コメントを、意味のまとまりで切り、内容に従って分類、分析を行った。1つの質問に対する回答中、1人の記述に同一のコメントが出現した場合には合わせて1回とした。しかし、異なる質問に対しての回答では、同一の人物による同一のコメントでも、出現回数に入れ、全68個となった。本節ではその分析結果から、反省材料と

なった否定的なコメントを検証したい。なお、受講者のコメントは原文通り記載する。

2.3.1. 他者への否定的な意見

自由記述欄には、クラスメートに対する否定的な意見が4名から、5回出現している。クラスメートと「間違った日本語」で話すことを否定的に捉えている学習者もいた。

- ・よかったけど、自分で選ばなければ、時々他の学生はきょうみがありませんと思いました。(S3)
- ・学生が発表するという授業の方法はいいだが、間違うところがあるかもしれません。学生だから、まだ勉強しています。間違うときが必ずあります。自分が気づかなかったの可能性もあるかもしれません。(S5)
- ・学生と話した日本語は正しい日本語ではありません。それは進歩になれません。(S6)
- ・学生の発表は時々間違いが多いので、(S6)
- ・ニュースの内容を考えると面白しろい内容ばかり考えて探したと思います。難しかったらみんなできないしつまらなかつたらコメントがよくないかなーと思って面白しろくて簡単なテーマばかり探したと思います。(S7)

細川（2004）によると、言語学習は「それ自体が具体的な目標を持った『他者との関係づくり』のための活動」であり、したがって、「教室は他者との関係をつくる場」である。「他者のニュースに興味がない」「他者の意見を気にした」というコメントは、このクラスでは学期末になっても、学習に必要な関係づくりができていなかったことを意味している。このことが、学習者が主体的になれなかった要因の一つではないかと考えられる。

2.3.2. 教師の指導を要望するコメント

教師の指導をより多く望む意見は、以下のように4名から5回出現している。

- ・先生からも勉強したいです。(S1)
- ・そのため、もし発表の前に、ちょっと先生に相談して、一緒に間違うところを直したら、もっといいと思います。(S5)
- ・発表のあとで先生もコメントをして、間違いところを直したら、もっと役立つと思

います。(S5)

- ・発表の後、先生からそれを直してもらえば、もっと勉強になれると思います。なぜなら、先生の日本語が正しい日本語だからです。それに、もし先生の訂正がもらえれば、次の人の発表はもっと完璧になれるかもしれません。(S6)
- ・先生のコメントがあつたらもっといい授業になると思います。(S7)

この授業では、当然のことながら、教師が受講者による準備を事前にチェックし、日本語の間違いも修正してから発表させていた。発表後に間違いを訂正することは、発表者のプライドを傷つける恐れがあるため控えめにしつつ、目に余るものについてのみ指摘した。また、全員の発表が一巡した時点で、自分の発表を録画したビデオを各自に配布し、個別にフィードバックを行う時間をとった。発表後に、ニュースの解説や補足説明も行っていた。それでも「もっと教師から習いたい」と望む学習者が4名もいたことは興味深い。この原因は「学習とは先生から知識を与えてもらうもの」という受動的な受講者の固定概念を、教師が変えられなかったことであると考えられる。

2.3.3. 学習内容や方法の変更を要望するコメント

教師からの指導をより多く希望する以外にも、9名中8名から、学習内容への要望が10箇所、授業方法への要望が8箇所出現している。以下に例を挙げる。

- ・歌や映画中の歌詞やせりふを勉強するのが欲しいです。そして、電話をする時使かうの言葉も勉強したいです。いつも電話をする時、始める時と終る時何を話せばいいか悩んでいます。(S2)
- ・ドイツに帰時、私はテレビニュースを分かりたいんです。そのためもっとまじめのトピックについてビデオを見たいです。(S3)
- ・ニュース以外色々な番組があるので、他の会話が入っている番組を見て、これを勉強した方がいいと思います。(S4)
- ・ニュース以外の勉強もしたいです。(S5)
- ・授業の場所はコンピューター室なので、インタネットのよく使う単語もならいたいです。例えば、どうやってインタネットで競売することやインタネットで面白い血型と占星の運勢を探すなどのことをやりたいです。(S6)
- ・日本の生活に直接、関係があることを勉強したい (S7)

- ・日本の歌もなりたいです。(S7)
- ・メールであたらしいことばをもらって勉強する学生はあまりいなかったと思います。
（私の話だけかもしれませんが^^）(S7)
- ・もっと日常的なトピックがほしいです。ほかには丁寧語や敬語の使い方もなりたいです。(S7)
- ・すみませんが，こんなコメントやポートフォリオはもう飽き飽きします。少ししないようにして欲しいです。(S8)
- ・ニュースを聞きながら，その聞いたニュースを言う練習をして欲しいです。(S8)
- ・単語なども試験の形式で勉強したいです。(S9)

筆者はオリエンテーション時にも，授業の中でも「授業についてリクエストは大歓迎する」旨を伝えていた。しかし，学期末までそれを伝えてきた受講者はいなかった。田中他（1993）は，コースの開始前に教師が作成するコースデザインはあくまでも「暫定的コースデザイン」であり，「コースが展開する中で学習者が自らのニーズやレディネスについて認識を深めるにつれて随時改善を加えていくもの」だと述べ，コースデザインの主役は学習者であるとしている。この考え方からすると，教師は常に学習者のニーズを把握していなければならない。もちろん，学習者の希望通りに内容を変更することが望ましいとは限らない。しかしこのクラスでは，受講者に様々な要望があったにも関わらず，教師にそれが伝わっていなかったことが，問題であった。

ポートフォリオを「飽き飽きしている」と感じている受講者がいたことは，衝撃を受けた。この受講者は非常にまじめな優等生で，課題や発表などもこちらが驚くほど完璧にこなし，不満など感じていないように見えていた。教師が感じる印象と，受講者の本心とは必ずしも一致しないものであるということを学んだ。ポートフォリオの意義や目的が，正しく伝えられていなかったとも考えられる。これ以降，学習者に記入させるアンケートなどは，項目を必要最小限に絞り，意義や目的をよく理解してもらった上で実施することになっている。一度にたくさん書かせるのではなく，毎回少量のフィードバックを得られるよう，後に「一言カード」を導入した経緯はここにもある。

2.3.4. 自己内省や，他者への肯定的なコメント

回答中に見られた，自己に対する内省や，他者への肯定的な意見は以下5つのみであ

った。特に、他者へのコメントは2つだけで、やはり他の学習者への関心が低かったことが窺われる。

- ・自分はその言葉や方法を分かるのにどきどきまちがいました。(S1)
- ・みんな、日本語が上手です(S1)
- ・文法が下手ですが、これからは絶対に頑張ります(S5)
- ・学生たちの選んだニュースは面白かったので、もう一度やってみたいです。(S6)
- ・最近の聴き取りは進歩になりました。テレビとラジオのニュースもどんどん理解できるようになりました。(S6)

2.4. 考察

学習者たちの発表は円滑に進み、授業は成功したかにみえた。しかしアンケート結果から、教師や授業方法、内容に不満を持ちながらも、教師に言われた通りの課題を最後まできちんとこなした受講者の姿が見えた。教材となるニュースの選択権を与えたり、学習者に授業を進行させることは、「学習者中心」の授業ではあるかもしれないが、「学習者主体」ではなかった。この教室には学習者同士、または学習者と教師の間に必要な対話がなかったことが、問題であったと考えられる。この反省を生かし、学習者主体の授業を目指した授業について、次章以降で報告する。

3. 実践の概要

3.1. 日本語Bの概要

日本語A終了から半年後、筆者は同様の、聴解と口頭表現の授業（以下この授業を日本語Bと呼ぶ）を担当した。日本語A同様、各科目週2コマ（1コマ90分）、全15週の授業である。

受講者は表3の通り、国で日本語を学習した短期留学生8名である。在日期間は学期終了時期である平成21年8月1日時点のものである。

この授業でも、最初に30分程度でニュースの発表を課した。受講者がその週のニュースから一つを選び、聴解タスクを作成し、発表した。これは、発表準備を行うことで、学習リソースへのアクセス力を高める目的があ

表3 日本語Bの受講者

	性別	国籍	在日期間
S1	女	韓国	12ヶ月
S2	女	タイ	12ヶ月
S3	男	中国	12ヶ月
S4	女	中国	12ヶ月
S5	女	台湾	12ヶ月
S6	男	アメリカ	12ヶ月
S7	女	英国	12ヶ月
S8	男	韓国	6ヶ月

る。また発表中にニュースについてのディスカッションを行い、意見表明をし、クラスメートとの対話から学ぶという意図もあった。

授業の後半60分では、多様なトピックについて、聴解タスクに加えて、様々な意見表明や伝達のためのタスクを取り入れた。活動は主に協働学習の形を取り、他者との対話を通して学ぶことを大切な目標の一つとした。

トピックと到達目標、授業の形態、使用教材は表4の通りである。ニュースの発表と並行し、各トピックを2-4回の授業で扱った。

表4 日本語IVAのトピック一覧

トピック	到達目標	授業形態	教材
1. 北朝鮮問題	準備すれば、時事問題について意見が言える	討論	アニメ「めぐみ」他
2. 日本の伝統文化	テレビ番組の内容を理解し、人に伝えられる	ジグソー法	美の壺
3. 外国人雇用問題	少し準備すれば、時事問題について意見が言える	討論	ジェネレーションY
4. 外国人農村	準備なしに、身近な問題について意見が言え、ディスカッションに参加できる	討論	ジェネレーションY
5. 流暢な自己紹介	流暢で印象深い自己紹介ができる	学校訪問	自主作成教材
6. 嘘	嘘がつける	ゲーム	自主作成教材
7. 第二次世界大戦	準備すれば、流暢にプレゼンテーションができる	発表会	映画のDVDなど
8. 待遇表現	適切な待遇表現を用い、目上の人と日常会話を続けられる	講義・ロールプレイ	自主作成
9. ニュース	聴いたニュースをすぐ人に伝えられる	ジグソー法の応用	動画ニュース

3.2. 一言カード

日本語Aでは受講者と教師との間に対話の実現しなかったことが問題であった。かといって、授業時間をそのために毎回長く割くことはできない。授業外で声をかけることはできても、常に受講者全員に目を配ることは難しい。この問題を解決すべく、日々の受講者の気持ちを理解し、コミュニケーションをとるために、毎回の授業で簡単な

記録活動を行った。A4用紙両面に30回の授業について書き込める記録用紙を作成し、これを一言カード³と呼んだ。毎回授業の後わりに、何か一言を書きこみ、提出してから帰ることを習慣づけた。ここには授業の感想だけでなく、コメント、メッセージなど、授業終了時に思ったことを何でも書いてよいと伝えた。ただし、授業に関する要望がある時は、必ず書くよう指示した。そして教師は毎回、返事を一言赤色で書き込んだ。特に授業への要望に関しては、必ず次の授業に何らかの形で反映させるように気をつけた。

筆者はこの一言カードを、この学期以降他の授業でも続け、効果を実感している。毎回少しずつ、何でも良いというシステムは、率直な意見を得やすいと考えられる。授業回によって否定的なものも、肯定的なものもあるからである。初めはほとんど何もコメントを書かなかった受講者も、回を重ねるにつれて素直なコメントを書くようになる。今後、この効果を実証する調査を行うことを課題としたい。

3.3. 日本人学生ボランティア

日本語Bでは、日本人学生のボランティア希望者を募り、積極的に採用し、ほぼ毎回数名が参加した。ボランティアには、活動の際、受講者と共にグループに加わってもらった。日本人学生ボランティアに関して、一言カードに以下のようなコメントがある。

- ・日本人とニュースを確認することはよくなりました。(S2)
- ・日本人と一緒にビデオを見たり、説明を聞いたりするのは本当に役に立つ。(S7)
- ・日本人と一緒にニュースの発表を詳しく話すのはいい。その外国人の意見の番組はちょっと気になったので、時間があったらブログに何か書くつもり。(S7)

S2は全受講者中最も日本語運用力が低かった受講者である。S7は非常におとなしく控えめで体も弱く、来日直後には、発表などをさせると倒れてしまうのではないかと心配した女子学生である。このような学習者にとって、分からないところを、教師よりも気軽に聞けるボランティアの存在は役に立つものと思われる。しかしながら、学期初めには興味本位からボランティアが多数集まるが、回が進むにつれ、自らの課題や試験で多忙になることもあり、欠席も目立つようになる。初めの数回だけで来なくなってしまうボランティアも少なくない。ボランティア制度を単位化するなどし、システムを構築することが必要である。

3.4. オリエンテーションとカウンセリング

日本語Bでは、授業の目的について初回の授業90分でオリエンテーションを行った。Can-doステートメントによるレベルチェックを行い、到達目標を話し合い、自律学習についても理解を促した。Karlsson (2007) によると、カウンセリングによって、学習者の動機づけのプロファイル、アイデンティティに対する情報、学習スタイルに対する内省など、グループ活動では得られない質的なデータが収集できるとされている。この主張に従い、学期の開始時に、1人当たり30分程度のカウンセリングを授業外で行った。

4. 教室活動

4.1. ニュースの発表

日本語Bでも、1人当たり10分、授業の最初の20～30分を使い、ニュースの発表を課した。1学期間で、1人当たり3回の発表をしたことになる。ニュースのトピックの偏りをなくするため、1～2回目は自由なトピックで、3回目は「政治・経済」に限定した。

発表者はその週のニュースから最も興味のあるもの一つを選び、聴解タスクを作成し、教師の指導を受け、発表しながら授業を進めた。日本語Aとの主な違いは、この活動の重点を、ニュースの内容についてのディスカッションに置いた点である。3～4人のグループに分かれ、日本人ボランティアも交え、視聴したニュースについて話し合い、討論する時間をなるべく長く取ることを心がけた。

4.2. 若者向けテレビ番組を模倣した討論

「ジェネレーションY」とはHNKで放映された、日本在住の外国人による討論番組である。1人が時事問題について何らかの提言を行い、他の参加者がその提言について1人ずつ賛成または反対の意見を表明し、討論するものである。授業ではこの番組を視聴し、同様の形式で討論を行った。

この活動以前に、「北朝鮮問題」を取り上げ、宿題として自分の意見を言う準備をしてから討論する練習を行っていた。ジェネレーションYの1回目「外国人雇用問題」では、番組を見た後に準備の時間を15分与え、討論をした。2回目の「外国人農村」では、提言を聞いた後にすぐ意見表明を行ってから、番組を見た。

この番組を用いたのは、同じ外国人である出演者による流暢な日本語での討論は、受講者にとって自らの目標となると考えたからであった。予想通り、以下のようなコ

メントが寄せられた。

- ・もし今日見たビデオに出できた外国人と同じように日本語をペラペラしゃべったらいいなあと思います～ (S5)
- ・えいぞのひとだちのようにとろんでできるまでがんばります。(S8)

4.3. ジグソー法を用いた聴解タスク

ジグソー法とは、社会心理学者Aronsonらが中心となって開発した学習法で (Aronson et al., 1997), 元々は異なる民族の生徒たちが、自らが持つ情報のギャップを埋め合うことにより、協力し、認め合う姿勢を養うことを目指していた。この方法を日本語教員養成に応用した実践報告に有田 (2004) がある。砂川・朱 (2008) は中国で大学院生対象の論文講読クラスにジグソー法を用いた実践報告を行っている。さらに朱・砂川 (2010) では同クラスの受講生に対するインタビューデータを質的に分析し、学習者に意識変容をもたらした要因を明らかにしている。

日本語Bでは、日本の伝統文化をトピックに、ジグソー法を利用した聴解タスクを取り入れた。表に示すとおり、クラスを3つに分け、それぞれが別の聴解DVD教材を視聴し、クラスメートに内容を伝えられるよう準備することを事前課題とした。授業では、同じ教材を見たものによる討論Ⅰ (エキスパートグループ活動) と、違う教材を見たものがグループになって行う討論Ⅱ (ジグソーセッション) を行った。トピックは受講者から希望の多かった「日本の伝統文化」を採用し、教材にはNHKのテレビ番組「美の壺」の「箸」「和菓子」「風呂敷」を使用した。活動の手順を表5に示す。

表5 日本語Bで取り入れたジグソー法の概要

活動の種類	内容	所要時間
聴解練習と発表準備	事前課題として、1人でDVDを見て、内容をクラスメートに伝えられるよう準備する。	事前課題
討論Ⅰ (第5回)	同じDVDを見た受講者が集まり、内容について議論し、理解を深める。	50分
討論Ⅱ (第6～7回)	違うDVDを見たメンバーが各1人ずつ集まり、内容を発表し、質問し合う。	60分
レポート執筆	全員が3つ全てのテーマについて理解したことレポートに書いて、ブログで公開する。クラスメートのレポートも読んで、ブログ上でコメントする。	事後課題

4.4. ジグソー法を応用したニュースの聴解タスク

ジグソー法は通常、いくつかのグループで行うが、この授業では、クラスを2つに分けて別々の聴き取り課題を行い、エキスパートグループ活動はクラスの半分で、ジグソーセッションはペアまたは3名で行った。ペアで行っても、伝達活動に必要なインフォメーションギャップはつくる事ができ、受講者の緊張を緩和し、発表に集中させることができた。活動の概要は表6の通りである。

表6 ジグソー法を応用した聴解タスクの概要

活動の種類	内容	所要時間
受講者(担当者)による教材選定と準備	授業の担当者2名がニュースを一つずつ選び、キーワードを選定、内容理解を確認するための質問を4問程度作成し、授業の前日までに教師のチェックを受ける。教師はクラスを二つのグループに分け、それぞれに別のニュース動画（またはリンク先URL）とキーワードを、メールで送信しておく。	事前課題
ニュースの聞き取りと理解	担当者以外の受講者は、メールで自分に送られたニュースを見て、内容を理解し、クラスメートに伝えられるよう準備する。	10分
討論による内容理解の確認	同じニュースを見た受講者が集まり、理解した内容を確認し合う。担当者は自分の選んだニュースを見たグループのリーダーとなり、補足説明を入れながら討論を進行する。	10分
内容の伝達	違うニュースを見た受講者同士がペアになり、お互いに自分の見たニュースの内容を伝え合う。	15分
質問回答による内容理解の確認	一人になり、その日のニュース（二つとも）について、内容に関する質問に回答する。	10分
担当者による解説と教師による補足	担当者が自分の選んだニュースを見せながら、全体で質問の答え合わせを進める。教師は補足説明を行いながら、受講者の内容理解を確認する。	25分

この活動の利点は、理解したニュースの内容をクラスメートに伝え、相手が後でその内容に関する質問に答えられるように準備させなければならぬため、受講者が目的と責任感を持って聴くことである。受講者からは以下のコメントがあった。

- ・ニュースの内容はあまりむずかしくなかったの、友達にせつめいできる（^v^）
（S2）

- ・復習しないと忘れそうです… (S4)
- ・グループでニュースをチェックするのはおもしろかったです！これからはこうやったらいいと思います。(S5)
- ・今日のニュースの発表で考えさせられていいと思ってる。理解だけじゃなくて、やっぱり理解したことを説明することも大事だ。(S6)
- ・ニュースの聞き取りのレベルはだんだんよくなってきたと思いますが、伝えるのもそろそろできるようになるはずです。(S7)

4.5. 嘘をつく

教室で練習を行うことの意義は、様々な目的に特化して練習をすることにもある。日本語Bでは、この聴解や口頭表現に「嘘を見破る」「嘘をつく」という目的を与えて練習を行った。嘘は後でばらすので、お互いを知ることにもつながる。手順は表7の通りである。

表7 日本語Bで取りれた「嘘をつく」教室活動

活動の種類	内容	所要時間
準備	自分について、嘘の話と本当の話を10程度準備し、用紙に記入しておく	事前課題
	教師はゲーム用の5000円札を10枚ずつ配る。受講者は3〜4人ずつのグループに分かれる。	準備
嘘をつく	1人の語り手が自分について嘘または本当の話を語る	1分程度
嘘を見破る	残りのメンバーは語り手の話を聞いて、それが嘘か本当かを考える。このとき、質問をしてもよい。決めたら、「嘘！」または「本当！」と言いながら5000円札を出し、賭ける。	3分程度
勝敗決定	グループ全員の答えが出そろったところで、語り手は、話が本当か嘘かをばらす。嘘か本当かが当たった場合は、賭けた5000円は戻り、さらに語り手から5000円が支払われ、外れた場合は、賭けた5000円は語り手のものとなる。	1分程度
	他のメンバーが語り手となり、これらを繰り返す	

この活動によって、クラスの雰囲気や和やかにし、関係作りを促すことができた。30回と長いコースの途中にはこのような楽しめる活動を取り入れることで、動機づけを高めることができると考えられる。コメントは以下の通りである。

- ・たのしかった (S2)
- ・友達はみんなうそつきではないかな～。ほとんどせいはいしたので (S6)
- ・おもしろかったんです。うそつきー (S8)

4.6. 待遇表現指導

受講者の大半からのニーズに応え、待遇表現を使いこなし、より自然で流暢に話すためのタスクを取り入れた。敬語表現の復習、フィラー指導、発音指導などを行った後、ロールプレイで、目上の初対面の相手との会話を想定し、とにかく失礼のないように会話を続けるという課題を行った。この授業を行った回には「敬語表現が好きだ」「面白い」「格好いい」など、学習内容への肯定的なというコメントが6名から一言カードに寄せられた。このように、学習者のニーズが一致している事柄については、積極的に取り入れることも必要だと考えられる。

5. 一言カードへのコメント

回収した7名の一言カードに書かれたコメントは、全部で254個であった。それを、日本語Aのアンケートに対して行ったのと同様に、内容ごとにラベリングし、分析を行った。結果を表に記す。

表8 一言カードの分析結果

	内容	例	数
自己内省 (91)	活動への評価	<ul style="list-style-type: none"> ・きんちょうしました。全部の準備を忘れちゃった (ToT) (S2) ・まじめに「箸」の発表の準備をしていましたが、つまらなかったかもしれません (S4) ・発表は思ったよりこわくなかった (S7) ・発表準備をもっとしたらよかったと思っています (S8) ・いい討論だと思います (S4) ・討論するとき、私たちの考えた方面はまだたりないと思います (S4) 	17
	日本語力の分析	<ul style="list-style-type: none"> ・僕は経済と政治のことが苦手です (S3) ・単語が足りないなら、うまくいけないと思います (S5) ・映像を見て自分の実力よくわかりましたTT (S8) 	9
	達成	<ul style="list-style-type: none"> ・につけいじんのことについてよくりかいてきたよ (S2) ・日本の独特な会社文化をもっと深く理解できるようになりました (S3) 	11

		<ul style="list-style-type: none"> ・なんとか読みながら理解できた (S6) ・フィルターの使い方をはじめてわかったのしかったです (S8) 	
	非達成	<ul style="list-style-type: none"> ・友達の話はちょっとはやいので、あまりききとれませんでした (S2) ・最後のトヨタのニュースはあまり理解できなかった (S7) 	5
	進歩	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろ分かってきました (S4) ・ニュースの聞き取りのレベルはだんだんよくなってきたと思いますが、伝えるのもそろそろできるようになるはずです (S7) ・わかるになってよかったとおもいます (S8) 	5
	課題発見	<ul style="list-style-type: none"> ・ふくしゅうしてみよう (S2) ・次回もっとおもしろくと思うんです (S3) ・今度音楽を発表に入れてみます (S4) ・自分のニュース試験の結果をもらって、聞き取りにもっと頑張りたい気持ちがあります (S5) 	35
	期待	<ul style="list-style-type: none"> ・月曜日の発表のビデオを何回も見て、発表を楽しみにしている (S7) ・ニュースを読む人の声は早くて、ちょっと分かりにくいですが、練習すれば、だんだん理解できるようになるはずだ (S7) 	3
	学習の反省	<ul style="list-style-type: none"> ・きょうは渡嘉敷島から帰ってきたばかりなので、あまり考えられなかった… (S5) ・今日のテーマに興味があるのに、つかれたのであまり考えられない ・週末あそぶすぎてで発表うまくすすまなかったんです (S8) 	6
他者評価 (21)	肯定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・S1さんのニュースは最高だー (S3) ・しかし皆さんの日本語は前学期より上手になったなあ気がします。(S5) ・皆の意見を聞くのが非常に面白かった (S6) ・みんなの発表はおもしろかった (S7) 	20
	否定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ぼんさいさんはちょうさいやく！ (S2) 	1
学習内容について (87)	肯定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・日本のぶんかが大好きです (S2) ・とても役に立っていると思います (S3) ・敬語やばりおもしろいです (S6) ・ニュースもずっときいてきょうみができるみたいです (S8) 	34
	否定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースの部分は前回よりくだらなくなるようだ (S3) ・今日のニュースはちょっとくだらないかな (S3) ・今日のニュースの部分はちょっとくだらなかった (S3) ・たぶん興味だんだん減られたかもしれない (S3) 	6

		<ul style="list-style-type: none"> ・でも新型インフルエンザのことはちょっとふるいんじゃないですか (S3) ・あまり株についてのニュース関心しないね (S5) 	
	意見・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・本当に深刻だ (S3) ・北朝鮮と韓国の問題は台湾と中国の問題と似ていますから、複雑な気持ちですよ！ (S4) ・そのEUなどについてのビデオを見て、少し怒りたかった。イギリス人として、EUはあまり好きじゃないからだ。最近ヨーロッパは一つの国になったようだから、アジアで作らない方がいいと思う (S7) 	19
	難しい	<ul style="list-style-type: none"> ・経済のニュースは難しかった。永遠に難しい (S3) ・とても難しくてあまり出来なかった (S6) 	24
	易しい	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースの内容はあまりむずかしくなかった (S2) ・ききとれやすいです (S3) 	4
活動について (44)	肯定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・ニュースの発表は緊張しても、達成感もあります (S5) ・今日、勉強になりました (S6) ・今日の授業は、難しかったのに楽しかった (S7) 	32
	否定評価	<ul style="list-style-type: none"> ・今日の内容は短い時間でいっばいあった (S6) ・準備の時間あまり足りなかったと思う。月曜日から木曜日までそのぐらいの情報を覚えるのは無理だ (S7) 	2
	改善案の提示	<ul style="list-style-type: none"> ・日本人の討論を見たいです (S4) ・最後に相手のビデオを見た方がいいと思います (S7) 	2
	感想・質問	<ul style="list-style-type: none"> ・和平学習の発表、やっと終わりましたー (S3) ・日本で、日本人も討論大会を行いますか？ (S4) ・自分のビデオを見て、すごくはずかしい!! (S5) 	8
その他 (11)	メッセージなど	<ul style="list-style-type: none"> ・遅刻したら、ごめんなさいー (S3) ・ゴールデンウィークおわたたね。僕、高野山が大好きです。(S3) ・むしあついですね… (S4) ・きょうからなつほんばんになっていますね。もっとくろくなるかも知らないんです (S8) 	11

学習内容への否定的な意見は6回出現し、うち5回は同一の受講者S3による。S3が「くだらない」とコメントしているニュースは、人気アイドルグループのメンバーの1人が泥酔した事件であった。しかし、S3はニュースのディスカッションで「なぜくだらないか」をクラスメートと討論し、他の内容については「おもしろい」「興味が持てた」と書いており、全体的には満足していたため、問題はないと考えられる。活動への否

定的な評価は、準備時間が足りなかったことに対する2回であった。

最も出現頻度が高かったものは、「よく出来た/出来なかった」「もっと頑張ろう」など、自分の日本語や活動について内省をしているもので、89回出現した。他者への肯定的評価は、20回出現した。調査方法が異なるため、単純に比較することはできないが、日本語Aのアンケートで1個しか見られなかったのと対照的である。他者への否定的なコメントは1件のみであった。

6. 自律的な学習への可能性

思いがけず、担当教員が直接教室へ赴くことができない事態⁴となったため、日本語Bは最後の7回の授業を教室外から指示を与えるという形で授業を行なうことにした。ジグソー法による聴解タスクは学期の終盤、第19回から28回の間に5回行う予定であったが、後半の3回はジグソー法の応用による授業を受講者のみで行わせることとなった。プリントだけを大学院生ボランティアに依頼、配布してもらい、自分たちだけで授業を続けるよう、指示を伝えた。

この期間の一言カードには以下のようなコメントが寄せられている。

- ・ぼんさいさんはちょうさいやく！（S2）
- ・今日はけいざいのニュースを発表いただきて、本当にむずかしかった（S2）
- ・僕のニュースは最高だった～。盆さい万歳～（S3）
- ・けいざいのニュースは難しかった。永遠に難しい（S3）
- ・今日のニュースは殺人事件が多いですね（S3）
- ・S7さんの傘で人を殴るニュースとS3さんの盆栽のニュースは本当に2人らしかった。おもしろかった！（S5）
- ・経済のニュースはかなりむずかしかったね。あまり株についてのニュース関心しないね…（S5）
- ・ニュースの発表はおもしろかった！（S5）
- ・今日はS6とせんせいになりました。いいけいけんでした。（S8）
- ・おもしろいS8先生ですねー！まじめ発表してくれてありがとう（S2）
- ・ニュースよかったです。（S8）
- ・先生、気をつけてください（S4）

コメントから、授業が平常通り行われた様子がわかる。発表の担当者が「先生役」をやったようである。何度か教室を視察に訪れた教員からも、皆真剣に、楽しそうに授業を進めていたという報告を受けている。教師である筆者が直接教室に赴き、教授することができないというのは残念であったが、「学習者の自律性を育てる」という目標を達成できたという可能性が示唆される出来事でもあった。

7. 結び

以上、日本語Aで行った「学習者中心」を目指した授業への反省と、それを踏まえて「学習者主体」を意識した日本語Bの実践について報告を行った。日本語Aでは、学習者を中心に参加させることばかりに重点を置き、学習者同士、学習者-教師間の対話を行うことが欠けていた。日本語Bでは、学習者が日本語を使って意見表明を行い、他者との対話を通して自己実現できる場を設けることに重点を置いた。この目的のためには、教師主導で行った活動も多い。細川（2004）は、学習者主体とは、「たんに学習者の意志のままに教室を運営することや、学習者ニーズと言われるものに従ってテーマを設定したり活動を任せたりすることではない」と述べている。日本語Bの受講者たちは、他者との対話により自己を表現すべく、教師から与えられた課題に積極的に取り組んだ。先日、帰国後1年が経過したS6から連絡があった。S6は母国では日本語専攻でないため、帰国後の勉強継続が課題であったが、現在も日本語クラブの部長として自律的に学習を続けているという報告であった。

なお、学期末にインタビュー調査を行う予定をしていたが叶わず、本実践報告では入手可能なデータのみからの分析となってしまった。より質的なデータの調査と分析を今後の課題としたい。

註

- (1) 国立国語研究所監修（1998）『日本語教育重要用語1000』バベルプレス
- (2) <http://jfstandard.jp/top/ja/render.do;jsessionid=5AFB39F779D6EE2B2BA660A6584865C7>
- (3) 琉球大学教育学部、道田泰司先生の授業から、アイデアを頂いた。同様の試みに、三重大学・織田揮準教授による「大福帖」や岡山大学の「シャトルカード」などがある。
- (4) この学期は2009年新型インフルエンザに対して警戒態勢が取られている時期であり、いったん学内に感染者が報告されると、学生や教員の大学への入構が長期間制限されることがあった。

参考文献

- 青木直子 (2005) 「自律学習」 日本語教育学会編『日本語教育辞典』大修館書店
- 有田佳代子 (2004) 「日本語教員養成入門課程におけるジグソー学習法の試み」『日本語教育』123号, pp. 96-105
- 牲川波都季 (2002) 「学習者主体とは何か」『ことばと文化を結ぶ日本語教育』細川英雄編, 凡人社
- 上田和子他 (2001) 「専門日本語教育のプログラム・デザイン—外交官・公務員日本語研修における選択システムの実践」『日本語国際センター紀要』11, 国際交流基金日本語国際センター
- 牛窪隆太 (2005) 「日本語教育における学習者主体—日本語話者としての主体性に注目して—」『リテラシーズ1—ことば・文化・社会の言語教育へ—』くろしお出版, pp. 21-36
- 梅田康子他 (2000) 「日本語集中コースにおける学習カウンセリングの試み」『日系研修員日本語研修報告書1998/1999』国際協力事業団海外移住センター, pp. 27-34
- 岡崎眸・岡崎敏雄 (1990) 『日本語教育におけるコミュニケーション・アプローチ』凡人社。
- 朱桂栄・砂川有里子 (2010) 「ジグソー学習法を活用した大学院授業における学生の意識変容について—活動間の有機的連携という観点から」『日本語教育』145号, pp. 25-36
- 砂川有里子・朱桂栄 (2008) 「学術的コミュニケーション能力の向上を目指すジグソー学習法の試み—中国の日本語専攻出身の大学院生を対象に」138号, pp. 92-101
- 田中望・斎藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』大修館書店
- 細川英雄 (1995) 「教育方法論としての「日本事情」—その位置づけと可能性」『日本語教育』100号
- 細川英雄 (2004) 『日本語教育は何をめざすか—言語文化活動の理念と実践』明石書店
- Aronson, E.; Patnoe, S. (1997) *The jigsaw classroom: Building cooperation in the classroom* (2nd ed.), Longman
- Karlsson, L., Kjisik, F., & Nordlund, J. (2007) Language counselling: A critical and integral component in promoting an autonomous community of learning. in *System*, 35, 46-65
- (琉球大学留学生センター)